

アーニョロ・ブロンズィーノ作《アポロンとマルシュアス》  
——風景の源泉とパラゴーネ——

瀬戸 はるか (東北大学)

本発表は、これまでミケランジェロやポントルモといった同時代のフィレンツェ美術との関わりの中で考察されがちであった16世紀の画家アーニョロ・ブロンズィーノ(1503-72年)について、その初期作品である《アポロンとマルシュアス》(1530-32年)の風景描写に着目し、本作をアルプス以北の美術受容を示す注目すべき例として位置付けることを試みる。加えて、そうしたイタリア以外の地域の美術を取り入れた背景には、典拠であるオウィディウスの『変身物語』に対して絵画の側から競合を挑む画家の意図が反映している可能性を提示する。

現在「アポロンとマルシュアス」を主題とするブロンズィーノの真筆作品は二点ある。一点はエルミタージュ美術館に所蔵され、もう一点は1995年にニューヨークの個人コレクションの中に新たに同定されたものである(J. T. Spike, 1995)。後者の作品は前者に比べて縦が約二倍大きい。横長の矩形画面下半分には土くれの丘や湖あるいは川を背景に人物像が描かれており、この描写はエルミタージュ作品にも共通する。また画面上半分には、エルミタージュ作品に見られない山や樹木、城砦、黒雲などが描かれている。ブロンズィーノの作品全体を概観すると、画面内に占める風景描写の割合は本作をピークに減少し、晩年にはほとんど描かれなくなる。ゆえに本作の風景描写に見られるモチーフの多様さと描写範囲の広さは特異なものである。またここで描かれる風景は、他の画家による同主題作品に見られるアルカディア的な風景ではなく、不吉な運命を予感させる暗雲垂れ込む風景であることが注目される。

しかし本作に関する先行研究では、主に人物描写に焦点を当てたものが多く、そこに自然と技芸のパラゴーネを読み取る解釈がなされてきた(M. Brock, 2002)。それに対して風景描写に関する言及は少なく、例えばドイツの画家・版画家デューラーとの関わりが指摘されるが、具体的な作品比較はなされていない(A. Emiliani, 2013)。

こうした先行研究を鑑み、発表者は本作の背景に描かれた自然モチーフに着目し、当時ブロンズィーノがイタリアで実見できたデューラーを中心とする北方の版画作品と比較検討することで、本作の風景描写の源泉を具体的に明らかにすることを試みる。

そうした北方美術の要素を作品に取り入れるという画家の選択は、典拠である詩で描写された風景を絵画の技芸によってより適切に表現するために採られたものであり、さらには、その典拠を乗り越えようとする試みであったと解釈することができるだろう。したがって本作は、ブロンズィーノの作品における北方美術の受容を示すとともに、自然と技芸だけでなく、絵画と詩の間の優劣を競う「パラゴーネ絵画」として描かれた可能性を指摘したい。